第 59 回戦争体験文庫資料展示

「奉祝国民歌紀元二千六百年」フィルムを“読む”

期間：2022 年 2 月 26 日～6 月 29 日

解　説

内閣が組織した紀元二千六百年奉祝会が発行していた雑誌『紀元二千六百年』は、昭和14年(1939)9月号に日本放送協会と共催で、奉祝国民歌の歌詞を募集する広告を掲載した。歌詞は「美シク明ルク行進曲ニ適」すると同時に、「栄光ニ輝ク日本ノ国体ヲ讃ヘ、日本ニ生レコノ盛世ニ逢フノ感激ヲ現ハシ国民精神ノ作興ニ資スル」ものであることが求められた。要するに日本のすばらしさに感動するようなものに、ということである。この広告は8月20日付東京朝日等各新聞他に掲載され、9月20日必着とわずか1ヶ月間に17,487扁の歌詞が集まり、11月15日には東京板橋区の増田光生の応募作が当選とされると同時に曲の募集も始まり（同前11月号）、12月15日には3,892曲の中から選ばれた東京杉並区の森義八郎の作品が、日比谷公会堂で海軍軍楽隊によって披露された（同前昭和15年1月号）。

この楽曲は各社からレコード化されたが、当館にはビクターレコードの音源に映像をつけたフィルムが残っている。フィルム自体の映写は当館では不可能であるが、当該コンテンツをデジタル転換したDVDがあり、当館2階のAVブースで視聴することが出来る（『奉祝國民歌：紀元二千六百年』請求記号155-ホウシ-DC、資料ID:711002231）。

本図録では、映像、字幕、音楽等フィルムの概要は2-3頁に示し、5-8頁に映像の一部を静止画化して示している。これでわかるように、フィルムは前奏曲と「君が代」伴奏があり、ナレーションが入ってから、本編「奉祝国民歌紀元二千六百年」に入るという構成になっている。ナレーションはやや早口で、聞き取りづらい箇所もあるが、意味を考慮して充てる漢字を推定したものは、3頁欄外に示すとおりである。口語化すれば次のようになろうか。

「神武天皇は、恐れ多くも天皇家の祖先である神々の残した意志を受けて、ご自身で東方のはるか遠い土地へと進攻の兵を進めると、他の勢力はみなこれに従わないものがなく、天地四方、国の内（原文「六合」）を平定して都を開き、畝傍山のふもと橿原で初代天皇陛下にご即位する大きな儀式をなされました。それから、一系の天皇の系統はいつの世も変わることなく続き2600年に及びました。今や支那事変（日中戦争）は、4年目の建設的段階となり、勝利を成し遂げるための実践が着々と成功しつつある時に、この遥か昔をしのび、我々は戦陣の中で国に報いる誠意を示すものであります」

前段は、当時の教育では史実として扱われていた（古川隆久『建国神話の社会史』中央公論新社、2019等）、神武東征から即位に至る「二千六百年」の起点までの解説である。「六合（りくごう）を兼ねて以て都を開き」は、もともとは日本書紀にある即位建都の大詔にある言葉で、「八紘（あめのした）を掩ひて宇（いえ）と為（せ）む」と続く（再増補版『大日本詔勅通解』龍吟社、1942）。世界征服が歴史的使命であるかのようにさえも解釈された、「八紘一宇（はっこういちう）」の語源となったくだりである。国による記念事業の一環として、東征の出発地有力候補とされた宮崎では、通称「八紘一宇之塔」が建築され、紆余曲折を経つつも現存している(新編『石の証言』鉱脈社、2017)。後段は日中戦争に関する解説である。宣戦布告なき戦争が紀元2600年たる1940年（昭和15）で4年目に入っていたのは事実であるが、「勝利完遂」が実現しつつあったとはとても言い難く、結果として日本は翌年の対英米開戦に追い込まれていく。

ナレーションに比べれば、歌詞は平易なものである。冒頭の「金鵄（きんし）」は、今でこそ耳慣れないが、神武東征中のエピソードのひとつで、神武天皇が大和へ攻め込んで土着勢力である長髄彦と戦った際、突如現れて天皇を勝利に導いた金色の鳥のことである。なおこの鳥はふつうト(ン)ビとされているが、小島亮は「鵄」の元義からして疑問であり、正史として中国の目を意識した日本書紀が、ユーラシア各地にあった猛禽による怪鳥伝説を取り入れたためではないか、と推察している（『生駒新聞の時代』風媒社、2021）。「大御言(おおみこと)」は一般には、天皇の言葉であるが、文脈上は前述した神武天皇即位建都の大詔をさすものであろう。肇国(ちょうこく)は建国とほぼ同義である。「荒ぶ世界」は当時の世界状勢を踏まえたもので、歌詞の募集が行われたころ、ドイツのポーランド侵攻とこれを受けての英仏の対独宣戦布告により、第二次世界大戦が始まった。「燦爛（さんらん）」はきらびやかで美しいことを指し、「弥栄（いやさか）」はいよいよ栄えるという意味である。

映像に目を移すと、神社の光景が多用されているのが目につく。特定できるものとしては、冒頭近く夫婦岩に続いて映し出される伊勢神宮、君が代が流れる直前の橿原神宮、3番の歌詞のところでの靖国神社がある。伊勢神宮は皇室の始祖である天照大神を祀る神社であり、1890年（明治23）創建の橿原神宮は神武天皇を祀り、奉祝事業ではその拡張が図られている。靖国神社は戦死者を祀ることにより名誉を与え、近代日本の対外戦争を支え続けた神社である。この3社が取り上げられているのは、建国神話と戦争が、密接に結びつけられた時代相が表れている点で、象徴的である。

5番の歌詞のところで見える建国奉仕隊は、橿原道場（現県立橿原公苑）の整備のため、土均しを中心とする作業にあたったボランティアで、学校や職場、地域等を単位に25人以上で組織された（『橿原神宮と建国奉仕隊』阪急百貨店部、1940）。磯城郡多村が組織した編成表を10頁に示した。近隣ということもあり、地域ごと19班小学校区単位の婦人班2班を組織して大挙参加しているが、全国各地で奉仕隊が組織され橿原を訪ねている。

橿原周辺と思われる農村風景は貴重なものだが、製鉄光景や機関車とともに、間奏の際に短く挿入されている大都市の光景は、日本の繁栄を印象付ける映像効果を狙っているものといえる。しかし、これらの大半が焦土と化す破局は、わずか5年後に迫っていた。

当館蔵フィルム

フィルムの構成			
時間	映　　像	字幕等（新字に変換）	音　楽
0:00	鳥居奥に門		前奏曲1
0:10	神楽殿	「製作　朝日映画」	
0:15	橋の奥に門	「制定　財団法人紀元二千六百年…」※1	
0:20	神社拝殿	「奉祝国民歌紀元二千六百年」	
0:30	神社の門	「独唱　徳山璉 四谷文子…」※2	
	（伊勢神宮周辺）		前奏曲2
0:40	夫婦岩		
0:50	五十鈴川		
1:00	宇治橋		
1:05	灯篭		
1:10	境内に遊ぶ鶏		
1:25	宇治橋		
1:30	雲海と山		
1:40	富士山?		
	（橿原神宮周辺）		
1:50	0		
2:05	神橋と二ノ鳥居		
2:10	手水鉢		
2:15	南神門を入門する神職たち		
2:20	南神門から外拝殿を覗く		
2:25	外拝殿		
2:30	宮城（皇居旧称）二重橋		「君が代」伴奏
3:00	神社参道を人がゆく		
3:10	拝殿前に人があふれる	ナレーション「神武天皇畏くも…」※3	
3:20	神社建物		
3:25	地球儀日本周辺から	「紀元二千六百年」	「奉祝国民歌
	中東あたりまで回す		紀元二千六百年」
3:40	畝傍山?から日が昇る	金鵄輝く 日本の	（1.斉唱）
	（農村光景）	栄ある光　身にうけて	
3:50	塀や蔵のある農家俯瞰	いまこそ祝へ　この朝	
3:55	畑と集落	紀元は二千六百年	
4:00	池のほとりを牛荷車が行く	あゝ一億の　胸はなる	
4:05	おだがけと農家	歓喜あふるる　この土を	（2徳山独唱）
4:10	遙拝する老夫婦	しっかとわれら　踏みしめて	
4:15	鍬を肩に農道を歩く後ろ姿	はるかに仰ぐ　大御言	

4:20	畑で鍬を振る人と牛鍬を使う人	紀元は二千六百年	
4:25	畑で種まき	あゝ肇国の　雲青し	
4:30	牛鍬耕のアップ		(間奏)
4:35	畑で鍬を振る		
4:40	建国奉仕隊員スコップ振るう		
	製鉄所光景		
4:45	花火が上がる		
4:50	菊の花	荒ぶ世界に　唯一つ	(3.四家独唱)
	(靖国神社)	ゆるがぬ御代に　生ひ立ちし	
4:55	一の鳥居と大村益次郎像	感謝は清き　火と燃えて	
		紀元は二千六百年	
5:05	二の鳥居と神門	あゝ報国の　血は勇む	
		潮ゆたけき　海原に	(4.徳山独唱)
5:10	桜の花	桜と富士の　影織りて	
5:20	満開の桜と橋	世紀の文化　また新	
5:25	松と富士山	紀元は二千六百年	
5:30	富士山アップ	あゝ燦爛の　この国威	
5:35	大都市の４景色		(間奏)
5:55	洋館、蒸気機関車		
	(建国奉仕隊)		
6:00	大勢で鍬を使う、幟旗も見える	正義凛たる　旗の下	(5.斉唱)
6:05	学生らしき３人のアップ	明朗アジヤ　うち建てん	
6:10	やぐらで作業	力と意気を　示せ今	
	もっこで土運び	紀元は二千六百年	
6:20	池の向こうに日が昇る?	あゝ弥栄の　日はのぼる	
6:25		「紀元二千六百年」	
6:35	海の向こうに日が沈む?	「終」	

時間はDVDのデータをダウンロードしたうえ、MP4変換したもので再生、計測したので、DVDで視聴した場合とは若干ずれが生じる可能性がある

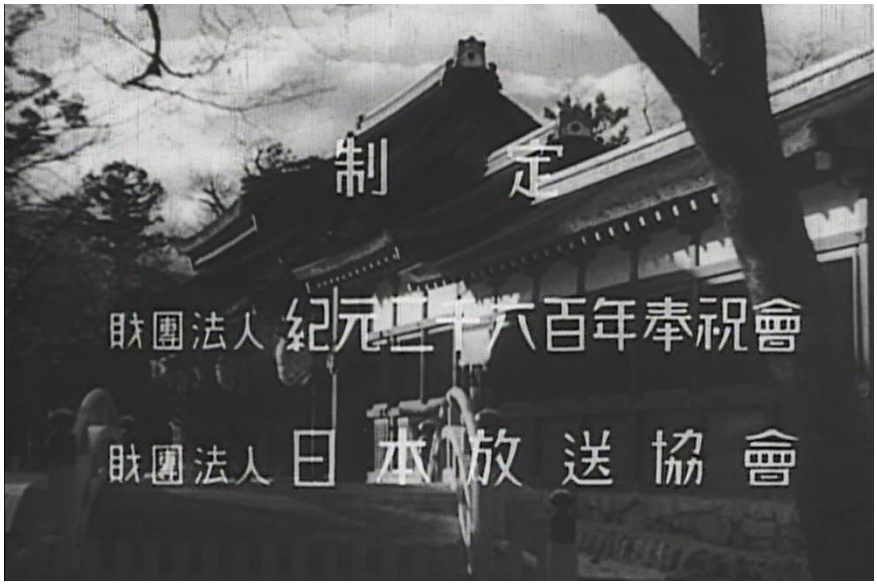
※1 「制定　財団法人紀元二千六百年奉祝会　財団法人日本放送協会」

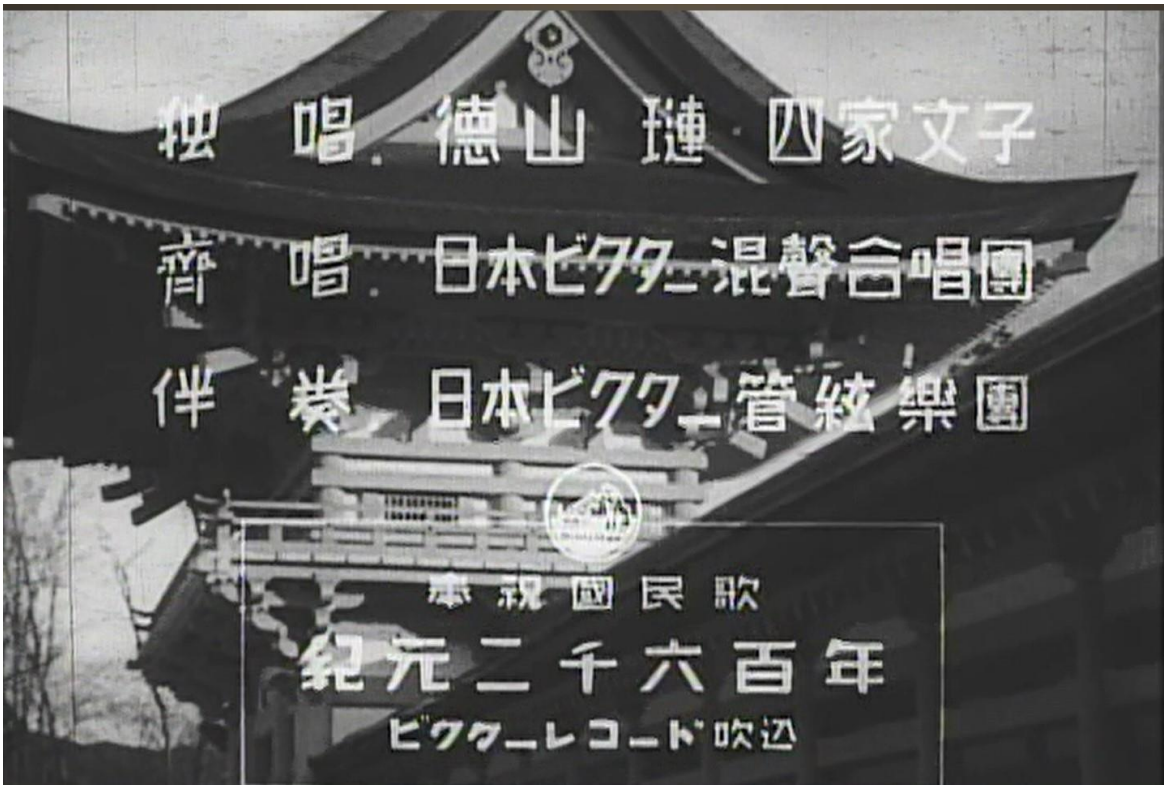
※2 「独唱 徳山璉　四谷文子　斉唱　日本ビクター混声合唱団　伴奏　日本ビクター管弦楽団　奉祝国民歌紀元二千六百年ビクターレコード吹込」

※3 ナレーションは以下の通り（漢字は推定）

「神武天皇畏くも皇祖皇宗の聖訓を体したまい、御自ら東方遥けき地に向かって征途につき給うや、衆中ついに靡かざるなく、ここに六合を兼ねて都を開き、畝傍山のふもと橿原にご即位の大典をあげ給う。以来一系の皇統連綿として万世変わることなく、ここに悠遠恒久２６００年、今や支那事変は４年の建設的段階に入り、勝利完遂の実践着々功を奏しつつある時に、我等その上世をしのび陣中報国の誠をいたさんと期するものであります。」

製作
朝日映画


制定
財團法人 紀元二千六百年奉祝會
財團法人 日本放送協會


独唱 徳山璉 四家文子
斉唱 日本ビクター混聲合唱團
伴奏 日本ビクター管絃樂團
奉祝國民歌
紀元二千六百年
ビクターレコード吹込

金鵄輝く　日本の

いまこそ祝へ　この朝

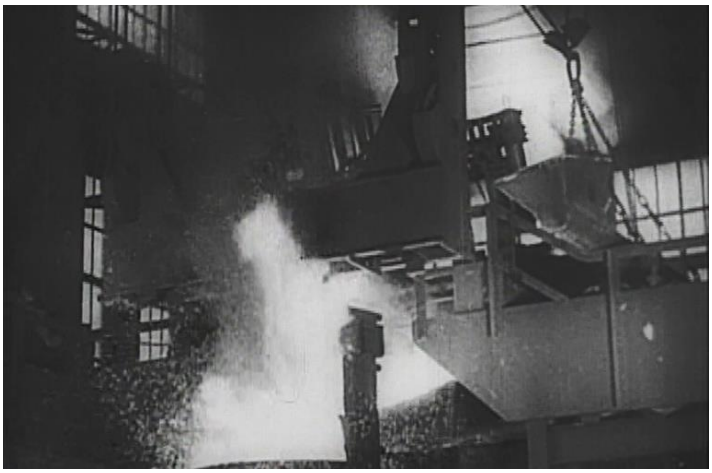
あゝ一億の　胸はなる

歡喜あふるる　この土を

紀元は　二千六百年

紀元は　二千六百年

あゝ肇國の　雲青し



荒ぶ世界に唯一つ

感謝は清き火と燃えて

あゝ報國の血は勇む

潮ゆたけき海原に

紀元は二千六百年

C576

正義凛たる　旗の下

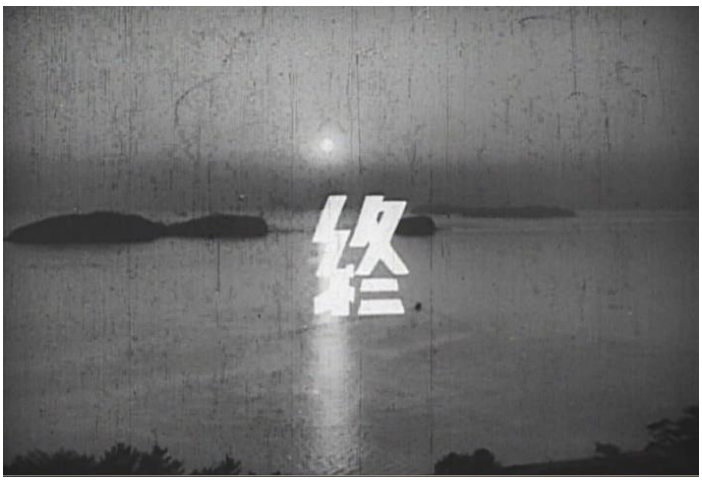
明朗アジヤ

明朗アジヤ　うち建てん

紀元は

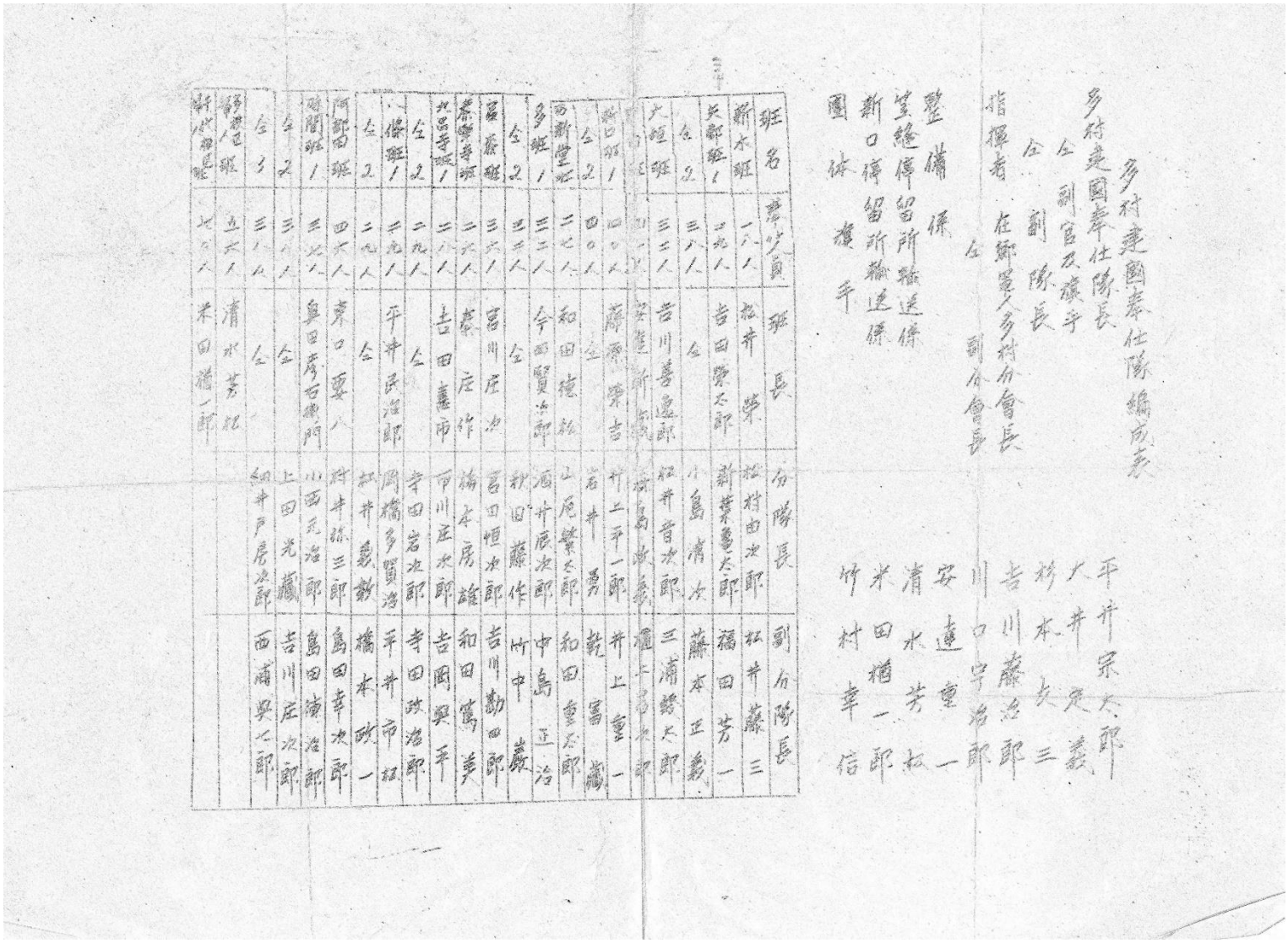
あゝ彌榮の　日はのぼる

紀元二千六百年


終

山口甚佐久撮影[昭和十年代橿原周辺史蹟等アルバム]（仮）より

このアルバムは、貼付されている「御道筋参拝入場証」等から、当時畝傍南小に勤務していた山口甚佐久の撮影によるものと推定できる。1955 年に橿原文庫に寄贈され、県立橿原図書館・図書情報館へと引き継がれた。『目で見る橿原・高市の 100 年』（郷土出版社、1993）にも、橿原道場や建国奉仕隊による整備光景、橿原神宮等を中心に 20 点弱の写真等が採録されており、本頁右上のものと右下のものが 85・86 頁に掲載されている。山口は 1904 年（明治 37）磯城郡阿部村（現桜井市）に生まれ、1923 年に奈良県師範学校を卒業後教員となり、勤務の傍ら絵画の講習会にも積極的に参加している（『小学校教員履歴書』1-T3-109　556008023）。



多村建國奉仕隊編成表

多村建國奉仕隊長　平井宗太郎
〃　副官及嚮導　大井定義
〃　副隊長　杉本友三
指揮者　在郷軍人多村分會長　吉川藤治郎
〃　副分會長　川口守治郎
整備係　安達重一
望遠停留所輸送係　清水芳松
新口停留所輸送係　米田橘一郎
團体護手　竹村幸信

班名	隊員	班長	分隊長	副分隊長
新水班	一八人	松井榮	松村由次郎	松井藤三
天部班	二九人	吉田榮太郎	新葉藤太郎	福田芳一
〃	三八人	〃	小島清次	藤本正義
大垣班	三二人	吉川善逸郎	松井音次郎	三浦鶴太郎
新口班	四〇人	安達新太郎	故島敬義	福上弟次郎
〃	四〇人	藤原榮吉	竹上平一郎	井上重一
〃	四〇人	〃	岩井勇	乾富藏
西新堂班	二七人	和田德松	山尾繁太郎	和田重太郎
多班	三二人	今西賢治郎	酒井辰次郎	中島正治
〃	三二人	〃	秋田藤作	竹中巖
服部班	三六人	宮川庄次	吾田恒次郎	吉川勘四郎
茶臺寺班	二六人	森庄作	橋本房雄	和田寫美
光明寺班	二八人	吉田義市	市川庄次郎	吉岡與平
〃	二九人	〃	寺田宮次郎	寺田政治郎
保班	二九人	平井民治郎	岡橋多賀治	平井市松
〃	二九人	〃	松井義勝	橋本政一
阿部田班	四六人	孝口要人	村井孫三郎	島田幸次郎
鶴間班	三七人	魚田彦吉郎門	川西元治郎	島田滿治郎
〃	三八人	〃	上田光藏	吉川庄次郎
〃	三八人	〃	細井戸房次郎	西浦與七郎
野迫川班	五六人	清水芳松		
新代和尾班	七〇人	米田橘一郎		

2022年2月
奈良県立図書情報館編、発行